

パネル発表「江戸川乱歩所蔵資料の活用による探偵小説研究」の発表報告

- 発表者…石川 巧・落合教幸・金子明雄・川崎賢子
- ディスカッサント…浜田雄介
- 司会…小松史生子

江戸川乱歩は、欧米における最先端のミステリーをいち

はやく吸収するとともに、犯罪学、法医学、性科学、心理学を始めとする隣接諸科学の知見を取り入れることに積極的な作家だった。一九二〇～三〇年代における都市の近代化、大衆文化の勃興、メディアの発達といった社会状況の変化を敏感に察知し、探偵小説の語り、描写、人物造型、プロット構成などにさまざまな新風を吹き込んだ。戦後は数々の探偵小説雑誌の編集に携わり、探偵小説界の隆盛と後継作家の育成に尽力した。

さらに、乱歩は探偵小説作家であると同時に、その生涯における様々なエピソードが伝説化される偶像であり、現在も新しいファンを獲得し続けている。ドラマや映画、漫画の原作になることも多く、その作品世界は日々新たに解

釈し直されているといつてよい。

こうした作家的特質を考えると、特に注目しなければならぬのは、彼が膨大な文献史資料を駆使して小説の着想や斬新なトリックを生み出す翻案家であると同時に、自作の構想や執筆の過程を事細かに記録保存するマニアでもあったということである。乱歩の文学的営為の全貌を明らかにするためには、彼が遺した旧蔵資料の整理・分析が不可欠なのである。

立教大学は二〇〇二年三月に旧邸の土地と建物（母屋、洋館、土蔵）を購入するとともに大衆文化研究センターを設立し、和書一三〇〇冊、洋書二六〇〇冊、雑誌五五〇〇冊を所蔵することになった。同センターには乱歩関連の膨大な資料が寄託され、原稿・草稿、書簡、切抜資料、手

帳・ノート・メモ類、戦時資料、読書ノート・評論執筆用資料、探偵小説・江戸文献に関するカード、雑誌編集や探偵作家クラブの運営に関する資料、書籍の書き込みに関する調査、脚本資料、映像資料、音声資料などが分類保存されている。

また、近年、乱歩研究は海外においても注目されつつある。「乱歩コンファレンス」を起点に始まった日本とアメリカの研究活動はすでに二〇年近い歴史を重ねているし、二〇一六年一〇月にはパリ日本文化会館とパリ・デイドロ大学において国際シンポジウム「Edogawa Ranpo oules labyrinths de la modernité japonaise」（江戸川乱歩あるいは近代日本の迷宮）が開催されている。シンポジウム企画者のひとりであるジェラルド・ブルが、「一九七〇年代に入ってから、大衆文化の再評価、文学理論の中の読者論、視覚論、ジェンダー論、ポストコロニアル理論、カルチュラル・スタディーズなどの諸理論により、乱歩の重要性とモダニティが再発見・再評価されるようになったのは、先ずは、アメリカと日本であった。今回のシンポジウムは、以上の変遷をもとに、また、没後五一年目に、日・米・欧の三つの視点を交差しながら、江戸川乱歩という人物、その作品、その背景とディスコースの再評価の契機となっ

た」（江戸川乱歩、巴里にやって来た。、『大衆文化』第16号、二〇一七年三月）と評価するように、乱歩の存在は欧米においても大衆文化やモダニズムとの関連において再評価されつつある。

今回のパネルは、こうした国内外の研究状況を踏まえて乱歩所蔵資料を広く公開していくための取り組みである。発表を行った四名は、いずれも大衆文化研究センターで研究活動し、日頃から乱歩所蔵資料の整理・保存について議論を交わしてきたメンバーである。二〇一七年からは立教SFR（立教大学学術推進特別重点資金）を取得し、（1）乱歩関連資料の活用による「芸術的な文学」の領域と「探偵小説」との関係性に関する研究。（2）大正後期以降の探偵小説ジャンルの成立を支えた読者層の文化的特質と、大衆的文学メディアを通じた探偵小説との具体的なコンタクトの様相の研究。（3）大正期以降の文学的モチーフの背景となっている一九世紀末から二〇世紀にかけての進化論、天才論、精神医学言説、および、その展開の具体的媒介となった海外文学と大正期以降に特徴的な文学的モチーフとの関連性についての研究。（4）大正期以降の文学に特徴的なモチーフやその物語的展開と乱歩作品のモチーフや物語の形式との関連性の具体的な研究。（5）現在の有力な探偵

小説研究者との意見交換を通して、探偵小説研究を文学史的記述に接続する意義やその可能性についての研究。——
を行っている。

学会当日のパネルでは、最初に落合教幸が「江戸川乱歩資料の現状―保存と公開に向けて」と題して所蔵資料とその現状に関する報告を行い、その後、石川巧「海軍外郭団体雑誌『くろがね』と江戸川乱歩」、金子明雄「〈大衆文学〉は実在したのか?——「探偵小説」のジャンル言説と読者イメージ」、川崎賢子「江戸川乱歩における脱異性愛的欲望のゆらぎと変容を探る」の順で発表を行った。後半は、デイスカッサントをお願いした浜田雄介氏の問題提起を経てフロア全体の議論に移行した。